

令和3年度(2021年度)企画展

吹田の絵図展

令和3年(2021年)9月25日(土)～11月14日(日)



神崎川筋吹田村絵図(個人蔵) 寛文5年(1665)

絵地図を意味する「絵図」という呼称は江戸時代に広まりました。そこには国境、山川、湖海、道路、田畑、家屋などが描かれ、支配する範囲や取り決めなどを図示するために作成されました。絵図には国絵図、村絵図という地域分類がなされる一方、荘園や寺社などの領有を示すものもありました。

令和3年度(2021年度)の企画展では吹田の絵図を取り上げます。上記の地域分類では村絵図が中心であり、吹田の低湿地帯や丘陵地帯の開発を目的とするものもあれば、引水や排水をめぐる取り決めを図示したものがあります。この展示を通して江戸時代の吹田にタイムスリップしていただければ幸いです。

(当館特別館長 中牧弘允)

神崎川筋吹田村絵図

今回、新資料吹田村絵図を紹介します。寛文5年（1665）の神崎川筋吹田村絵図（表紙写真）は年紀のある吹田の江戸時代の絵図のうち最古といえるものです。吹田村の各村（大字）の位置が示され、神崎川と中洲の様子が描かれています。

中央には次のように記されています。

「是者 御公儀様江指出候絵図之控也、為御上使ト安部四郎五郎様松浦猪兵衛様、寛文五年巳中秋ニ御江戸より御上着被成、五畿内之川々見分成并絵図悉御取被為成候、則当村之絵図筆者当所之住人同村にて和仁庄右衛門此之分書立申され候を、当所三庄屋中より被指上候、為後代存則和仁庄右衛門殿を頼写是置者也、

寛文五年巳九月日 吹田ほりおく村之住人
早田茂右衛門尉長好」

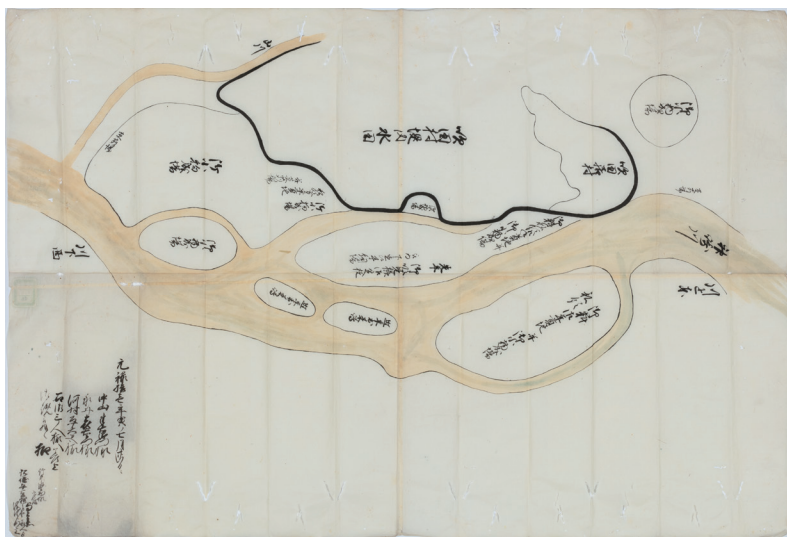
寛文・延宝年間には、淀川をはじめ諸河川の川床の上昇、水行の滞りが著しくなり、水利、通船などに差し障りが出ていました。万治年間（1658－61）には淀川とその枝川筋に洪水が毎年発生し、寛文年間にも大風雨・洪水が多発しました。寛文5年（1665）5月、小姓組松浦信定と書院番阿部政重が、淀川・木津川・大和川の巡視を命じられました。文中に出てくる安部四郎五郎は書院番組の阿倍四郎五郎正重、松浦猪兵衛は小姓組の松浦伊右衛門信貞と考えられます。寛文5年（1665）中秋8月に兩人が江戸から来坂し、五畿内の川々を見分し絵図を採集しました。吹田村では吹田村住人和仁庄右衛門が描き、吹田村三庄屋（仙洞御料、竹中領、柘植領）から差し出されました。後々のため和仁庄右衛門に頼んで、写しを作成したという内容です。

川幅、堤間の距離、中洲の広さ、堤外の建物や植物の様子を示し、水行の妨げとなりそうなところを描いています。

松浦信定と阿部政重は、寛文5年

（1665）の年末に巡視を終えましたが、その巡検中にも洪水が起きています。寛文6年（1666）2月には「諸国山川掟」が老中の連署により公布されました。内容は、川筋に土砂が流出し水行が滞ることを防止するため、草木の根を掘り取することを禁止し、川上の山に植樹すること、川筋河原に新規の田畑を開くことなどを禁止するものでした。

その後、幕府は本格的な治水の対策を講ずるため、天和3年（1683）若年寄稲葉石見守正休、大目付彦坂壱岐守重紹、勘定頭大岡備前守清重に河村瑞賢を随行させ畿内の諸河川の見分をさせました。調査結果をうけて、河村瑞賢に治水工事が一任され、瑞賢は貞享元年（1684）～4年（1687）、新安治川を開き、瑞賢山と呼ばれる防波丘を造り、淀川・中津川の水勢を均分にするなどの対策を行いました。元禄11年（1698）3月幕府より禄米を受け、名を平太夫と改め、再度畿内治水工事を任されました。堀江川の開削と難波島工事を行い、翌元禄12年（1699）に江戸に戻り、完成を報告しています。元禄11年（1698）に吹田村から提出された絵図の写しが神崎川筋吹田村付洲絵図（下写真）です。瑞賢らは調査のため淀川流域の村々に河川の状況を提出させたのでしょう。（当館学芸員 池田直子）



神崎川筋吹田村付洲絵図（当館蔵） 元禄11年（1698）

悪水井路絵図



摂州島下郡別府三ヶ村吉志部惣郷中悪水井路絵図（当館蔵）
寛文12年（1672）、享和元年（1801）写

江戸時代の吉志部村、吹田村、垂水村、榎坂村は神崎川に面した低湿地帯で、悪水が滞りやすいという問題を抱えていました。悪水とは稲の生育を妨げる余剰な水のことで、神崎川沿いの村々は悪水処理に苦慮していました。

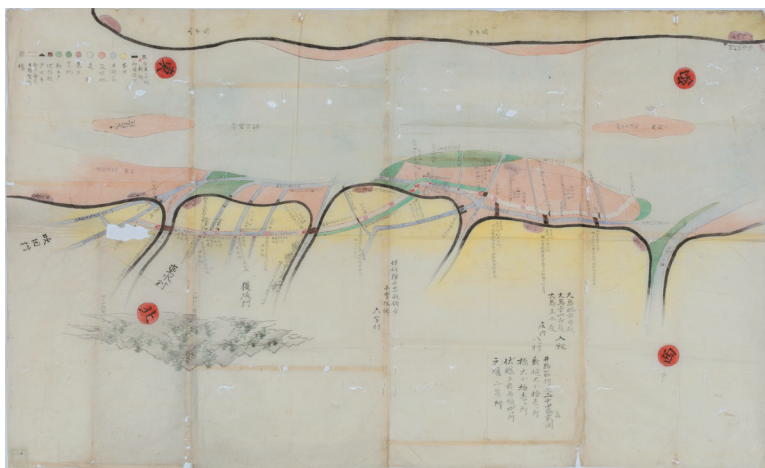
淀川・安威川・神崎川沿いの下流の村々は上流の村々の悪水抜き井路を引き受けることになります。井路は土砂の堆積などによって水はけが悪くなります。これを解消するため、土砂を取り除いたり、より川下へ井路を伸ばすようになります。写真上の絵図を見ると鳥飼悪水井路と三ヶ村（一津屋村・新在家村・別府村）悪水伏越樋が、吉志部村村内を通り吹田村にまで至ることが分かります。この二つの悪水井路は吉志部東村から流れる大溝筋と直交するところで、流れが交差する複雑な流路になっています。安永7年（1777）閏7月、別府組三ヶ村（一津屋村・新在家村・別府村）は悪水井路を吹田村まで延伸しました。その後、天明7年（1787）9月、鳥飼組五ヶ村の悪水井路も加わりました。このため、吹田村の字入道から竹ヶ鼻の間に

両悪水が入り込むことになりました。吹田村は、井路の管理・補修についての取り決めを関係する八ヶ村と交わしました。その後、井路を深堀りしていたので、両側が崩れ落ち、寛政12年（1800）閏4月、吹田村は八ヶ村を相手取って訴訟を起こし、翌享和元年（1801）4月に示談となりました。同様に吉志部村五ヶ村（小路村・東村・南村・七尾村・吉志部村）も八ヶ村と証文を交わし、井路の補修、悪水の慣行などを取り決めています。

吹田村では吹田村内での悪水吐きができず、明和9年（1772）に垂水村・榎坂村へ吹田村の悪水井路を延伸して排水するようになりました。その普請の前後に

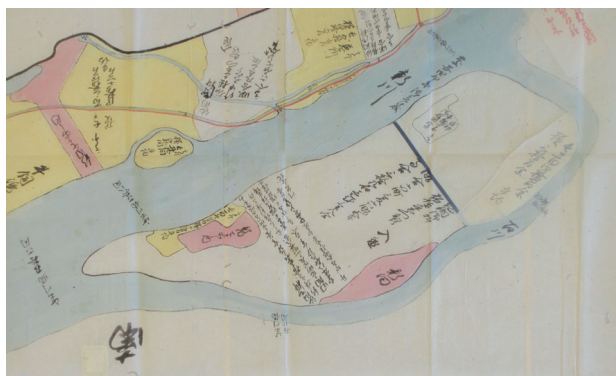
作成された絵図は『吹田市立博物館だより』14号に紹介しています。写真下は吹田村・垂水村・榎坂村の悪水井路を、さらに洲到止村まで延伸計画を図示した絵図です。弘化4年（1847）に吹田村をはじめ神崎川下流村々11ヶ村が大坂町奉行に悪水井路延べの嘆願書を出しました。文久元年（1861）ようやく奉行所の検分を受けています。流域の村々が関係する悪水井路問題は、村々の利害がうまく一致するとは限らず、交渉は難航することがありました。

（当館学芸員 池田直子）



神崎川筋吹田村垂水村榎坂村井路絵図（当館蔵）江戸時代末

東御旅町・西御旅町はなぜ吹田？



写真① 神崎川筋外島絵図（部分 当館蔵）
宝永5年（1708）、寛政2年（1790）写

吹田市東御旅町、西御旅町は神崎川以南に位置します。川は市境となることが多いですが、東御旅町、西御旅町はなぜ吹田市なのだろうと思っている方も多いのではないのでしょうか。

答えは江戸時代の吹田村の絵図をみるとよくわかります。吹田村を描いた絵図はいくつかありますが、新川と古川に挟まれた中洲が現在の両御旅町なのです。つまり、古くは両御旅町の南側を神崎川が通っていました。近代の護岸工事が行われる以前は、川は氾濫すると流れを変えることがたびたびありました。吹田村でも川の氾濫などにより神崎川が流路をかえたのでしょう。では、いつごろ新川ができたのでしょうか？宝永5年（1708）作成の絵図を寛政2年（1790）に写した「神崎川外島絵図」（写真①）には「慶安四年御立被成」とあります。いまのところこの資料でしか確認できていませんが、慶安4年（1651）だとすれば、江戸時代初期に新川ができたことになります。また、この絵図では古川と新川に挟まれた中洲の東寄りの部分に「氏神牛頭天王御旅所除地 立会」と書かれており、

元禄11年（1698）の「神崎川筋吹田村絵図」（表紙写真）にも「吹田氏神御旅所」と書かれています。この中洲が吹田村氏神高浜神社の御旅所であったことがわかります。泉殿宮も祭神は牛頭天王であり、吹田村氏神であることから、泉殿宮の御旅所でもあったかも知れません。寛文5年（1665）の絵図では御旅所は示されておらず、元禄11年（1698）の絵図では御旅所が明記されています。寛文5年（1665）の段階では流作場としてこの中洲が安定していませんでしたが、30年ほど経過して流作場が安定し、御旅所がおかれるようになったのかもしれませんが、『吹田市史』第2巻の付図「吹田市大字・小字図」ではこの中洲は天王島、御旅島、大畑島、池田島、寺裏島、新川尻島から成り立っており、御旅島が現在の現地名の御旅町の由来であることがわかります。ただ、現在高浜神社の御旅所は春日神社となっています。春日神社は明治41年（1908）に高浜神社に合祀されました（井上正雄編『大阪府全志』巻之三 清文堂出版 1922年）。高浜神社の渡御祭りについては『吹田市史』第八巻に紹介されています。

（当館学芸員 池田直子）



写真② 摂津国島下郡吹田村絵図（部分 当館蔵）
元禄11年（1698）

資料名	分岐地点	新川幅	古川幅	合流地点	年代	西暦	写真
神崎川筋吹田村絵図	七拾五間	六十二間	四拾間	百拾三間	寛文5年	1665年	表紙写真
摂津国島下郡吹田村絵図		平均九十五間	平均拾三間		元禄11年	1698年	写真②
神崎川筋外島絵図		六拾四間 六拾八間	拾五間 拾貳間	九拾六間	宝永5年 寛政2年写	1708年 1790年写	写真①



令和3年(2021)7月1日、JT生命誌研究館の館長・永田和宏先生に、科学者としてのお話と、歌人としてのお話を中心に伺いました。

**永田和宏(ながた かずひろ)**

京都大学理学部卒業。理学博士。

京都大学胸部疾患研究所教授、同再生医科学研究所教授、京都産業大学総合生命科学部学部長、同タンパク質動態研究所所長等を歴任。京都大学名誉教授、京都産業大学名誉教授。現在、JT生命誌研究館館長。

京都大学在学中に短歌を始め、歌人としても活躍している。

中牧：今日は、細胞生物学者で、歌人でもある永田和宏先生にお話を伺います。どうぞよろしくお願いします。

永田：よろしくお願いします。

中牧：発生生物学者の岡田節人京都大学名誉教授は、JT生命誌研究館の館長もされておられました。岡田先生には、私も時々お会いしたことがございまして、いつも赤い服を着て、すごくダンディで。

永田：あんな目立った京大の教授いなかったですよ。赤いブレザーで、緑のパンツで、それでポルシェでしょ(笑)。『道楽科学者列伝』っていう本があるんですけど、昔、科学者って自分のお金で研究をしていたんですよ。自分の道楽で。そんな時代があった。

中牧：貴族趣味ですね。その岡田先生のお父上(利兵衛)が所有していた貴重な品々が没後に寄贈され設立されたのが兵庫県伊丹市の柿衛文庫ですね。岡田先生ご自身も名誉館長をされておられ、俳諧コレクションを所蔵・展示する博物館です。

永田：実は私自身は柿衛文庫に一度も行ったことがないので、ぜひ一回行ってみたいと思っています。

中牧：私は全く俳句は作らないんですけども、暦の研究をやっていて、俳句をされる知り合いも多い

んです。

永田：なるほどね。

中牧：文人の伝統をひいている岡田家の中に科学者が育った、という感じですね。

永田：科学者というのは、象牙の塔に閉じこもって、研究だけで他のことに一切興味を持たないというそういうある種の科学者像みたいなものが以前はありましたが、岡田さんがそれを完全に打ち壊したとは言えないけど、好き勝手に・・・だいたい服装が赤いブレザーに緑のパンツ、学会でも目立っていました。しかし、一見好き勝手をしてられるようでいて、それは従来の科学者というものの固定観念をどこかで打ち壊そうみたいなお気持ちもあったのだと思いますが、研究にはそういう外面とは別にすごく真摯に向き合っておられました。

中牧：本当はノーベル賞に近い人だったんじゃないですか、その分野では。

永田：国際発生生物学会の会長をされておられましたね。個人的には、僕の博士論文審査の主査なんです。僕は大学院に入らずに就職しちゃったもので、その後大学に帰ってきて論文書いて岡田さんに主査になっていただいて、博士論文を出しました。そんなわけで、岡田さんが初代館長だったJT生命誌研究館の3代目館長になるというのは、不思議な縁を感じますね。

中牧：2代目館長が、「生命誌」という概念を打ち立てた中村桂子先生でしたね。理系の研究者ではあるけれども、文系にも非常に造詣が深いという、そういう方々がこの館長の職を務められるというふうに見えます。

永田：そうですね。ここは年1回テーマを決めて、本を作っていたのですが、中村さんが館長の時に、対談をするということで初めてこの館に呼ばれたんですね。その時の年間テーマは「遊ぶ」でした。

中牧：「虫めづる姫君」が2代目で、たくさん対談されているんですね。ここの展示では、中村先生が対談した相手の方の顔写真とプロフィールがマッピングされていて、あれも一種の「遊び」ですね。そういう館長さんの後を永田先生が引き継がれたわけですね。先生はどんなふうに3代目を引き継ぐお考えでしょうか。

永田：これまでは研究者としてやってきていましたから、自分たちの仕事は英語の論文として、同じ分野の研究者に向けて発信してきました。歌人として

は歌を発表したり、評論やエッセイを書いたり、あるいは新聞や歌会始などの選者をやったりと、一般社会に向けた発信はあったのですが、研究者としては、むしろ一般メディアに向けての発信というのは、自分である種閉ざしてきたところがあって、研究に専念して、世界のジャーナルに新しい成果を出すというのが一番大事だったんですよ。

中牧：科学者として。

永田：はい。そう思ってやってきましたので、たとえば『細胞の不思議』『タンパク質の一生』『生命の内と外』と言った一般書は少しは出してきましたが、あまりその辺のことはやってなかったんです。ただやはり、歳をとってきたこともあり、サイエンスという我々の知識をどんなふうに世の中に知ってもらおうかというのは、すごく大事だと感じていたので、ここの館長もそういう意味でお引き受けしました。ここは、サイエンスのコンサートホールという言い方をしております、岡田先生はすごく音楽の好きな方で、京都市の音楽顧問をしておられたので、そんなこともあって、サイエンスをみんなでコンサートのように楽しむ、それは非常に大事なことだろうと思います。

中牧：心を一つにしないとコンサートは成り立たないので。

永田：そうですね。発する方と受け取る方が、そこで一緒にならないとだめ。そういう意味で、サイエンスを皆に知ってもらうためには、どうしたらいいのか。どうしたらそのおもしろさをうまく伝え、興味をもってもらえるか。この研究館に来て、知識を得てもらうのではだめだと思うのです。ここに来て、疑問をもってもらう、「問い」は発掘してもらう、興味というのはそこからわいてくるものなので、そんなことを思いつつ、JT生命誌研究館に着任しました。その時たまたまこのコロナ禍に正面からぶつかってしましまして。

中牧：館長着任の時に、館に来ることが出来なかったというのをどこかの新聞で拝見しました。

永田：館長として最初に決めたのは、休館することと館員の自宅待機ですね。こんな歌を作りました。「休館と自宅待機を要請し館長初日の仕事終へる」。

中牧：それいいですね(笑)。

永田：そんな本当に特殊な時で。それで最終講義も大学でペンディングになって。

中牧：いつされたんですか。

永田：今年の2月でした。1年遅れて。ちょうどハイブリッドになって、緊急事態の前だったので、会場に100人くらい来てくれて、後は全部YouTubeで流すという形でした。千数百人が聞いてくれたみ

たいで、これは却^{かえ}ってありがたいことでした。

中牧：イレギュラーですね。

永田：本当にイレギュラーです。

中牧：そういう中でも新聞記事などにいろいろ発信されましたね。

永田：ある意味、これほどサイエンスと一般の人たちが、距離が近くなったという経験は、世界史全体の中でもなかったと思うんですよ。

中牧：我が身の問題として、科学的というか、疫学というか、医学というか、それを考えるきっかけにはなりましたね、確かに。

永田：サイエンスの基本を知ってもらうことがまた、人々をある種守っていくのに必須のことでもあるということ、認識してもらう機会になったと思います。おっしゃって頂いたように、去年は本当にほとんどの新聞とかメディアからインタビューにいられて、「どう思われますか、どうしたらいいですか」と聞かれました。例えば政府は、「石けんで手を洗いましょう、三密を避けましょう、うがいをしましょう」と言います。「石けんで手を洗いましょう」というのはいいんですけどもね、ここに「なぜ石けんで」という訳を一言付け加えるかどうかで伝わり方は全然違う。このコロナウイルスの場合は——ウイルス全部がそうではないですが——コロナウイルスは、外にエンベロップという膜をまとっているんです。その中にウイルスの遺伝子が入っているんですけども、ウイルスが我々の細胞から出てくる時、細胞の膜を被って出てくる。我々の細胞膜って、簡単に言ってしまうと油のようなものです。油は石けんで溶けますよね。石けんや洗剤は、界面活性剤と言って、油汚れを水に溶かす働きがあるのです。ウイルスはエンベロップという油の膜をまとって出てくる。だから、石けんで手を洗うとエンベロップが溶けちゃう。こうなるとウイルスは失活して、感染性を失います。こういうちょっとした知識を、ひとこと言うことで、一般の人が、それだったら、やっぱり石鹸で手を洗わないとダメなんだから手を洗うようになるのではないのでしょうか。ただ「石けんで手を洗いましょう」と言うだけでは効果が薄いように思います。

中牧：水だけではだめだということですね。

永田：そうですね。だからそういう意味でも、ちょっとした本当に基本中の基本なんですけれど、ウイルスについて知ってもらうということが、身を守るために絶対大事なんだということを今回ほど痛切に感じたことはなかったですよ。三密を避けるっていうのも流行語になりましたけど、選歌をやっておりますので、そこでもいっぱい投稿歌があるんですけど

ど、ウイルスとバクテリアの区別がついていない人が多いですね。「ウイルスに攻撃されている」「ウイルスを撲滅しなければならない」というような歌がいっぱいあります。これは、一般の人たちの素朴な感覚だと思うんです。ウイルスは難しいところがあって、「生命でない」とは言えないですけど、生命と非生命の中間のような存在です。自分を殖やすためには、我々の細胞、ヒトだけではないのですが、何か特定の細胞の中に入って、その道具を借りないと自分が増殖できない。そういうものなのです。

中牧：それがウイルスの特性なんですね。

永田：はい。それを知っていると「空気中に漂っているだけでは、ウイルスは殖えていかない。我々の細胞に感染しなければ、ウイルスは増殖しない」、それを知っていると「おのずから人と人が近寄ってはダメだ」ということが自然に納得できる。

中牧：宿主がいないとウイルスは生存できないというか、宿主が死んじゃうとそれでウイルスもなくなるわけですよ。

永田：そうですね。古く狩猟民族の時は、こんなパンデミックは起こらなかったんです。農耕民族になって、人々が集団生活をするようになってから、このパンデミックはあちこちで起こるようになった。交通の便が発達して、短期間に次の所へ行くようになると、都市から都市へとウイルスが伝播していく。途方もない話で、僕もほんまかいなと思いますけど、船で移動する海路では、ウイルスが次の都市まで伝播するんですよ。海路だと地中海なんて2、3日で次の港に行きますよね。ところが陸路だと次の都市に辿り着くまでに何日もかかる。その間に感染した人は途中で死んじゃうので、ウイルス感染は広がらなかったと読んだことがあります。グローバル化は、パンデミックを起こす大きな要因になっています。

中牧：天然痘なんかは日本に入ってきたのも海上交通ですね。

永田：そうですね。人類がこれまでやっつけることができたウイルスって、天然痘だけなんです。これだけは地上からなくなった。これ、すごいことだと思いますよ。

中牧：試験管の中にはまだありますね。

永田：今、ロシアとアメリカに保管されているんですけども。いずれどうするか議論になると思います。何か起こった時のために残してあるんですけど、実は世界中からもう完全に天然痘がなくなった後で、もう一回だけ発生したんです。それは、保管していたある研究室からダクトをつたわって漏れちゃった。

中牧：今後、感染症はさらに広まっていくでしょうか。

永田：そうですね。僕はこれからパンデミックの頻度は高くなると思っています。ウイルスっていうのは、向こうから我々に襲い掛かってくるものではなくて、我々がわざわざウイルスに手を伸ばしていつているんです。今回の新型コロナウイルスも、たぶん森の中でコウモリと平和に共存していたわけですよ。人間がそこに手を伸ばしたために人に移ったわけですよ。特に中国は野生動物をどんどん売るので、そこから人に伝播する。手つかずだった森林のなかに開発と称して人間が無遠慮に入って行ったり、温暖化で北極の氷が溶けると、我々が想像もつかない数のウイルスが出てくる恐れがあります。

中牧：氷の中からですか。

永田：北極海の氷の中には、ちょっと想像できない数のウイルスが閉じ込められていると考えられています。この間、氷を溶かして、実際に全く新しいウイルスを生き返らせたという報道がありました。

ウイルスは細胞の外にいる時は単なる物質なんです。細胞の中に入ると生命になる。我々が普段「ばい菌」と言っているバクテリアですが、バクテリアにもウイルスは罹る。バクテリアの中で生きているウイルスもいる。植物にも罹ります。ウイルスはあらゆるところにいて、宿主と共生しているんだけど、それがたまたま人間に出会ってしまうと、ホストジャンプと言って、新しい宿主に重大な疾患を引き起こす場合があります。そうするとこんな大きな社会現象に。森林破壊とか温暖化とか、いろんな理由でどんどん感染爆発の間隔が短くなっているような気がします。100年前にスペイン風邪があったけれど、ここ20年でもSARSやMERSがあったし、新型インフルエンザがあったしということで、どんどんパンデミックの頻度が高くなってきている。

中牧：それは、人流や物流が激しくなっていて、また人の手がさらに奥に奥に、開発の手が入っているからですね。

永田：そうですね。携帯なんかで、今この時刻に世界中の空を飛んでいる飛行機をリアルタイムで見るソフトがあります。見ると、恐ろしくなりますよ。世界中の人々がこんな規模で移動しているのかと。こんなふうにパンデミックが起こるのは当然だと思わない訳にはいきません。

中牧：飛行機が媒介してウイルスを伝播させている。今回のコロナ禍を経験した人類は、文明社会の大転換を求められているのかもしれない。本日は、大変貴重なお話をうかがうことができました。ありがとうございました。

は や り や ま い 令和3年度ミニ巡回展「**流行病と新型コロナ**～100年後の人たちへ～」について

吹田市立博物館では、100年後の人びとの情報源となるよう、新型コロナウイルス感染症に関連する資料を収集しています。今はありきたりのものでも、100年後には現在の新型コロナウイルス感染症の感染拡大についての実態を知る情報源として貴重な歴史資料となります。

令和3年(2021)の現在も猛威を振るう流行病(疫病=伝染性をもつ感染症の流行)ですが、実は人類はその歴史の長さだけ、さまざまな流行病に悩まされてきました。過去の流行病においても、人びとは病の苦しみだけでなく、差別や死別などによる悲しみを経験し、社会内部のさまざまな軋轢に悩まされてきたのです。

現在、6月26日から11月19日までの約5か月間の予定で茨木と吹田の計8会場を巡るミニ巡回展を実施しています。9月13日からは、吹田市内での展示が始まります。

今回は、吹田市立博物館が建物を飛び出し、地域内のいくつかのコミュニティに出向いてミニ巡回展を開催しているわけですが、このこ



ハガキ(スペインかぜ)(個人蔵) 代資料や体験談の大正9年(1920)

とでコロナ禍における人の移動を最小限に抑えることを意図しました。また、令和2年(2020)2月から収集を進めている新型コロナウイルス感染症に関する現他に、痘瘡、コレラ、スペインかぜなどの歴史資料も展示しました。これらの取り組みが、現代のモノや声を集めて後世に残すという博物館の存在意義を地域社会に認識していただくきっかけになることを願っています。

この展示を、これまでとこれからの流行病と人類の関わり方を考えるヒントにいただければ幸いです。

(当館学芸員 五月女賢司)

■会場・会期(中止や変更となる場合があります)

●吹田市役所

中層棟1階正面玄関ロビー(101 市民課前)・高層棟1階展示ケース(133 市民課マイナンバー窓口前)

(会場は高層棟1階展示ケースのみになる場合があります)

9/13(月)～9/24(金)

※閉庁日:土・日・9/20(月)・9/23(木)、
開場時間:午前9時～午後5時30分

●吹田市立中央図書館 中2階休憩コーナー

10/2(土)～10/17(日)

※休館日:なし、開館時間:午前10時～午後6時、木・金は午前10時～午後8時

●吹田市立千里山・佐井寺図書館 2階復元教室2

10/23(土)～11/7(日)

※休館日:10/28(木)、開館時間:午前10時～午後6時

●吹田市立子育て青少年拠点 夢つながり未来館

1階エントランスホール

11/15(月)～11/19(金)

※会期中無休、開場時間:午前10時～午後5時30分(初日は午後1時から・最終日は午後3時まで)

■オンライン講演会

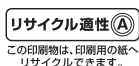
(当館ホームページ内の「バーチャル・ミュージアム」で公開)

- ①「宗教人類学からみたパンデミック・エンデミックとエピソードと比較して」
吹田市立博物館 特別館長 中牧弘允
 - ②「人類の進化からコロナ後の社会を考える」
総合地球環境学研究所 所長・前京都大学 総長 山極壽一氏
 - ③「コロナの時代をどう生きるかーマリ出身学長から日本社会への提言」
京都精華大学 学長 ウスビ・サコ氏
- ※②と③は9月13日より公開予定

吹田市立博物館だより 第87号 令和3年(2021年)9月3日発行

編集・発行/吹田市立博物館

〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL 06(6338)5500 FAX 06(6338)9886 ホームページ <http://www2.suita.ed.jp/hak/>



この冊子は2,500部作成し、1部あたりの単価は25円です。
森林認証紙と植物油インキを使用しています。